

春期福音特別集会（1）

湖上のイエス

――ヨハネ伝第6章16～71節――

1973年3月21日（南房保田）

小池辰雄

キリスト直結 「心安かれ、我なり、懼るな」 しょうがないやつ 徴中の徴 御霊の権威 神の業 驚くべき実在に圧倒されて 一切の判断を超越している世界 図太い世界 霊的具体性 生命のパン 霊的現実 キリストと一つになる

【ヨハネ6・16～71】

16 夕になりて弟子たち海にくだり、¹⁷ 船にのり海を渡りて、カペナウムに往かんとす。既に暗くなりたるに、イエス未だ来りたまわず。¹⁸ 大風ふきて海ややに荒出づ。¹⁹ かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、船に近づき給うを見て懼れたれば、²⁰ イエス言いたもう『我なり、懼るな』²¹ すなわちイエスを船に歡迎しに、船は直ちに往かんとする地に著けり。

²² 明くる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘のほかに船なく、又イエスは弟子たちと共に乗りましたまわず、弟子等のみ出でゆきしを見たり。²³ （時にテベリヤより数艘の船、主の謝して人々にパンを食せ給いし処の近くに來る）²⁴ ここに群衆はイエスも居給わず、弟子たちも居らぬを見てその船に乗り、イエスを尋ねてカペナウムに往けり。²⁵ 遂に海の彼方にてイエスに遇いて言う『ラビ、何時ここに來り給いしか』²⁶ イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならでパンを食いて飽きたる故なり。²⁷ 朽つる糧のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに与えんと為るものなり、父なる神は印して彼を証し給いたるに因る』²⁸ ここに彼ら言う『われら神の業を行わんには何をなすべきか』²⁹ イエス答えて言いたもう『神の業はその遣し給える者を信する是れなり』³⁰ 彼ら言う『さば我らが見て汝を信ぜんために、何の徴をなすか、何を行うか。』³¹ 我らの先祖は荒野にてマナを食えり、録して「天よりパンを彼らに与えて食わしめたり」と云えるが如し』³² イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝らに与えしにあらず、然れど我が父は天よりのパンを与えたもう。³³ 神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり』³⁴ 彼等いう『主よ、そのパンを常に与えよ』³⁵ イエス言い給う『われは生命のパンなり、



我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。³⁶然れど汝らは我を見てなお信ぜず、我さきに之を告げたり。³⁷父の我に賜うものは皆われに来らん、我にきたる者は、我これを退けず。³⁸夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。³⁹我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。⁴⁰わが父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』⁴¹ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言い給いしにより、⁴²呟きて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今「われは天より降りし」と言うか』⁴³イエス答えて言い給う『なんじら呟き合うな、⁴⁴我を遣しし父ひき給わずば、誰も我に来ること能わず、我これを終の日に甦えらすべし。⁴⁵預言者たちの書に「彼らみな神に教えられん」と録されたり。すべて父より聴きて学びし者は我にきたる。⁴⁶これは父を見し者ありとにあらず、ただ神よりの者のみ父を見たり。⁴⁷まことに誠になんじらに告ぐ、信する者は永遠の生命をもつ。⁴⁸我は生命のパンなり。⁴⁹汝らの先祖は、荒野にてマナを食いしが死にたり。⁵⁰天より降るパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。⁵¹我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』

⁵²ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』⁵³イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。⁵⁴わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。⁵⁵それわが肉は眞の食物、わが血は眞の飲料なり。⁵⁶わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。⁵⁷活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらす者も我によりて活くべし。⁵⁸天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠に活きん』⁵⁹此等のことはイエス、カペナウムにて教うる時、会堂にて言い給いしなり。

⁶⁰弟子たちの中おおくの者これを聞きて言う『こは甚だしき言なるかな、誰か能く聴き得べき』⁶¹イエス弟子たちの之に就きて呟くを自ら知りて言い給う『このことは汝らを躓かするか。⁶²さらば人の子の原居りし所に昇るを見ば如何。⁶³活すものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。⁶⁴されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり』。イエス初めより信



ぜぬ者どもは誰、おのれを売る者は誰なるかを知り給えるなり。⁶⁵斯て言いたもう『この故に我さきに告げて父より賜わりたる者ならずば我に来るを得ずと言いしなり』

⁶⁶ここにおいて弟子等のうち多くの者、かえり去りて、復イエスと共に歩まざりき。⁶⁷イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』⁶⁸シモン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。⁶⁹又われらは信じ、かつ知る、なんじは神の聖者なり』⁷⁰イエス答え給う『われ汝ら十二人を選びしにあらずや、然るに汝らの中の一人は悪魔なり』⁷¹イスカリオテのシモンの子ユダを指して言い給えるなり、彼は十二弟子の一人なれど、イエスを売らんとする者なり。

●キリスト直結

司会者が読まれたヨハネ第一書4章は新約聖書の最高のところの、あるいは最深のところの一つであります。パウロのコリント前書13章の「愛の讃歌」というのがありますが、内容的にずばりと言っている点では、パウロも凄じけれども、コリント前書第13章と今のヨハネ書簡の第一書4章は愛について告白した双壁と言ってもいいところです。

もちろん、我々一人びとりはキリストに直結です。この「キリストに直結」は、私は『この道を往く』『獨協学園図書館リンデンバウム叢書2、1973/2/28発行』の中にも書いた通りで、

「私はプロテスタントでもカトリックでもありません。いわゆる無教会主義者でもいざいしません。キリスト直結です」

とはつきり書いた。『この道を往く』を読んで、クリスチャンでも何でもない人が、

「小池さんは天から降ってきたような人だ」

というようなことを感想で書いてきたのがある。私は地獄から這い上がってきたんですけれども(笑)。天から降ってきたのはキリストだけです。

とにかく、私は、福音書をこうやって開くでしょ、ヨハネ伝6章とかなんとかを。これを見ていると、もうしゃべるのが嫌になっちゃいますね、どういふもんだか。だんだん集会ができなくなるのではないかと思っている。それくらい私はもう酔っているんです、キリストに。君たちは酒に酔ってもわるくはないけれども、このキリストに本当に酔う人になる。我々はキリストに酔う人にならなくてはダメだ。

内村鑑三先生記念講演会とかいって毎年やります。この3月の終わりにもある。私たちはいつもキリスト記念講演会です。正にキリストを念に記するんです。心の中にぎざみこむ。そういう講演会をしゅっちゅうやっているわけだ。その他の講演会はいらない。なにも内村先生をけなすわけではないけれども。内村先生で足踏みしているのと、あなた方が小池と言ってくれるのとは意味が違う。



●「心安かれ、我なり、懼るな」

では、ヨハネ伝第6章16節から。

16 夕になりて弟子たち海にくだり、¹⁷ 船にのり海を渡りて、カペナウムに往かんとす。既に暗くなりたるに、イエス未だ来りたまわす。

これはマタイ伝の書き方とだいぶ違うんですが。

¹⁸ 大風ふきて海ややに荒れ出づ。¹⁹ かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、船に近づき給うを見て懼れたれば、

ヨハネ伝は非常に簡単に書いてある。実は、マタイ伝の方によると、キリストはその前の晩に徹夜して祈った。その前に大きな大奇蹟をやっている。二つの魚と五つのパンで何千人に食わしている。まあ、福音書の中であれくらいおそろしい奇蹟はちよつとない。キリストはもの凄い天的エネルギーが出ましたから、そのあとで、くたびれてカラカラになつてしまったので、また父の懐に入つて御霊のエネルギーをいただかないとどうにもならん。それで夜もすがら祈る。夜もすがら祈るといふのは、夜もすがら父の懐に入るといふことです。そして本当に父のエネルギーをそのままいただく。私たちが、

「主さまー!」

と祈るときに――もう私はこの頃、「主さま」としか祈らなくなつてしまつたんです、正直――「主さま」と祈るといふことが、キリストが

「父よ!」

と祈ることと同じことになつてきた。そうすると、普通のクリスチャンは、

「キリストは、『天にまします我らの父よと祈れ』と仰っているのに、あなた方は

なぜ、『主さま』と祈るか?」

なんてくだらないことを言う。すぐ、

「三位一体はどうしてくれるのか?」

なんて言う。何を言っているかというんですよ。

「父よ」と祈ろうが、「主さま」と祈ろうが、「御霊よ」と祈ろうが、もう三つのものは一つで、私たちには分裂してない。特に中心になるのは、私たちにとつては何といつても贖い主キリストですから。贖いを要らない人は、どうぞ「主さま」なんて祈らなくてもいいよ。私はキリストの贖いがなければどうにもならない男だから、パウロさんと同じように。「主さま」と、本当にぶつつぶれて祈ると、直ちに主さまがくる。それはもう、「南無妙法蓮華経」や「南無阿弥陀仏」よりか速いです、「主さま」の方が。非常に簡単です、言葉が。とにかく最高の、単純な偉大さというのは。「アーメン」の「アー」だけでもいい――「アー」でも「メン」でも何でもい――とにかくもう極まるところは簡単になつてしまう。

そのキリストは夜もすがら祈つて、もう物理的法則は完全に乗り越えてしまつた。全く靈法の世界に入つてしまつた。体重なんかあれども無きがごとし。ですから、海の上を渡つ



てくるんです、これははつきり。

「波にどれくらい触れているか触れていないか」

なんてなことではない。これは普通の神学者や牧師さんにはその驚くべき霊的現実が受けとれない。私はちつとも不思議な人間でない。そのくせ、どういうものだからしらんけれども、それがたとえ受けとれる。非常に簡単な人間ですから。(異言)。そういう世界に入りますと、もう私の中にグーッと何か生きてくる。それだから、時々異言になってしまったりして、申し訳ない。

ですから、キリストは海の上を渡ってこられた。もちろん、その驚くべき現実が彼らに読めないものだから、

「何だ、これは。化けものが来たか」

と、変化^{へんげ}のものかと思って、弟子たちが懼^{おそ}れあわてた。ところが、キリストが、

20 イエス言いたもう『我なり、懼^{おそ}るな』

「心安かれ、我なり、懼るな」

と言われた。このヨハネ伝には

「我なり、懼るな」

だけれども、マタイ伝には

「心安かれ、平安があれ」

とある。「シャーローム」という言葉がある。全体でもってたった四字ですよ、ギリシア語でアラミ語だと三字だね。この「心安かれ、我なり、懼るな」は人生のいろんな波風に遭ったときに、この湖上のイエスの言葉は非常に大きな力になる。

「心配するな、私だよ。こわいことはないぞ」

と。これはキリストのじかじかの言葉ですから。キリストの言葉は決して、毛ほども偽りがない。そのまま完全に現実です。

「心安かれ、我なり、懼るな」

と言うと、

「でも、こんなものですから、ちよつとこわいです」

なんて、そんなことを言っているうちはいつまでたつてもダメです。

「はいっ!」

と言わなくては。「はい」の他なにもありはしない。そうすると、自分の中の疑いも恐れもみんなすつ飛んでいってしまう。恐れ、疑いは禁物の世界です。普通の現実、恐れと疑いと、妬^{ねた}みと争いとでゴタゴタゴタゴタやっている。そんなものはみんなすつ飛んでいって、雲散霧消してしまう。



●しょうがないやつ

²¹すなわちイエスを船に歡迎迎えしに、船は直ちに往かんとする地に著けり。

なんて書いてあるけれども、本当はそれどころじゃないんだ。ペテロは風を見て沈みかかったものだから、「SOS!」というわけですよ。

「助けてください!」

「よしっ!」

と、キリストは捕まえて、彼を舟の上にまた乗つけてやった。

「どうぞ、信仰うすきや」

とやられてしまった。みんな平伏して、

「これは神の子だ」

と言った。そういう現実がまず先にありました。

聖書の現実には、聖書も語りきれないような凄い現実ですから。どうぞ、この福音書の現実には、福音書を見ていると、この文字の背後からグーツと迫ってくるもの、あるいは呻くもの、叫ぶもの、そういうものが聞こえてこなくては。

霊覚のある人は、墓場の中に入って行くと、浮かばれないで死んだ人の呻き声がいろいろ聞こえてくるそうさ。だから、もし幽霊が出たり、そんな声が聞こえてきたら、その人のために執り成して祈ってやるといいよ。ちつともこわがることはない。みんな可哀相なんだから、

「どうしましたか?」

というわけだね。そして、祈って成仏させてあげる。それだけのことを、あなた方はできるんですよ、キリストにあれば。「キリストに在る」ということは、そんな形容詞で言っているのではない。パウロが、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と言うときにはもの凄い一如の世界からものを言っている。何か「キリスト」と言うと、

「こっちはダメだから、ちよつとそっちの方にいてください」

と思つてね、変てこな謙遜をしている。そうじゃないですよ。キリストはそんな変てこな謙遜は嫌いなんだ。

「お前はしょうがないから、私はお前の中に入るんじゃないか」

「病める者が医者を要す」

というわけだね。しょうがないやつなんかは捨てられるんだ、キリストに。しょうがないやつだけが本当に天国に入っていく。我々はみんなしょうがないやつですよ。しょうがない人は、どうぞ、キリストのところに来ないでくださいよ、自分でやってくださいよ、自分で。

「私はそんな助けはいらないから、自分でいきます」



と。はいはい、どうぞ。しかし、どこかで行き詰まるよ、必ず。しょうがないやつは、本当はそう言えないくせに、しょうがないような顔をしているんだ、みんな。我々は、しょうがないということを自覚している。はやく自覚した方がいい。そして、このキリストさまにくる。

「汝の足を洗わないで、何の関わりあらんや」

とキリストは言われる。キリストに、

「汝とは関わりございません」

なんて言われたら、これはお終いだ。我々はキリストに関わられている人間なんです。罪びとなるがゆえに、関わられている。その関わりは、さっき読んだように、愛なんです。愛の関わりをもつてキリストは来てくださる。他の関わりではない。救いの関わりです。愛とは救いということだから。救いの関わりをもつて来てくださるものに、

「それは要りません」

というやつはどこにあるか。遠慮していて、どこにあるか。もうあるがままでもつて、

「はい、どうぞー」

とお迎える。こんなありがたい楽なことが世の中にあります。絶対の世界です。そういうわけであります。

●徴中の徴

²² 明るる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘のほかに船なく、又イエスは弟子たちと共に乗りたまわず、弟子等のみ出でゆきしを見たり。²³ (時にテベリヤより数艘の船、主の謝して人々にパンを食せ給いし処の近くに来る)

ここはマタイ伝と同じようにパンを食べさせられたあとのほなし。

²⁴ ここに群衆はイエスも居給わず、弟子たちも居らぬを見てその船に乗り、イエスを尋ねてカペナウムに往けり。²⁵ 遂に海の彼方にて

ティベリア湖の西の方です。

イエスに遇いて言う『ラビ、何時ここに来り給いしか』²⁶ イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、徴を見し故ならでパンを食いて飽きたる故なり。』

「あんなにパンを食べさせてくれたので、これはありがたいから、困ったらずぎキリストのところへ行こう」

なんて言つてね、これは御利益教になつていゝんです。群衆は御利益教になつていゝ。この場合、「徴を見し故ならで」というこの「徴」という言葉にまた躓いてはいかん。

「ユダヤ人は徴を求め、ギリシア人は知恵を求む」

というパウロの言葉がある。しかし、徴ということとは、聖書の宗教は創世記から黙示録に



至るまで本当は徴の宗教なんです。徴中の徴がキリストです。「シンボル」(Symbol 象徴)という。ゲートの『ファウスト』もこれが大きなシンボルです。キリストこそ神さまの徴なんです。キリストの他に実は徴はないんです、本当の徴というのは。キリストという驚くべき徴を中心に行っているわけです。

「我を見し者は父を見しなり」

ということとは、

「我は父の徴だぞ」

ということですよ。キリストは父の現象体であります。我々はキリストの徴にならなければダメです。パウロは

「この徴を身におびたり」

と言っている。あれは十字架のキリストだよ。キリストの十字架、十字架のキリストという徴を彼は身におびているから、「自分を煩わすな」と、ガラテヤ書第6章の一番終わりの方で言っている。カトリックの尼さんみたいに、胸に十字架をかける必要はない。我々はもう身に十字架をおびている。

「十字架されている」

ということは、本当にキリストの十字架の徴を受けとっているということ。

十字架されているから聖霊が来るんですよ。現実の我々は十字架されているから、だから、御霊が来るんです。十字架されていないやつには御霊は来ない。その点で、パウロが、

「十字架の他は何をも語るまじと思う」

と言ったのは本当なんです。十字架は要かなめですから。申し上げているとおり、

「門構えの中に十の字」

を書いた門なんだから。これが本当の我々の門なんだ。この「十」は光っている。向こうからスーッと光がさしてくる。

だから、いいですか。十字架の徴を身にちゃんと帯びて、十字架された私たちですから、いくら人間小池はどんな野郎であろうと、そんなことは問題じゃない。そしてパッと、御霊が来ますから、その世界に入ってしまう。

●御霊の権威

26 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ぬるは、

徴を見し故ならでパンを食いて飽きたる故なり。』

御利益宗教の故にお前たちはしょうがないなと。イエスはせっかく、この福音書でさんざんいろいろな徴を現した。キリストの徴がいろんな言葉に、行為に現れているが、それを彼らはみんな御利益的に受けとっているんです。片一方では今度は、観念的に受けとっているんだな、学者たちは、文化人は。無教会なんていうのは非常に観念的に受けとって



いる。とにかく、キリスト教研^{けん}究^{けん}会^{かい}なんていうのはみんなそうだ、キリスト教学^{てがく}会^{かい}だとか。復活のキリストがお魚を食べた。その記事を見たら、神学者たちのグループが――私もそのグループにいたのだけれども――みんな笑ったんだよ、そのところにきたら。私は「この野郎!」

と思ったんだ。彼らは、

「これは後から付け加えられたところの宗教的な物語である」

というような解釈の仕方をするわけだ。もう私はつまらなくなつたから、その学会から出てしまった。それは日本の一流の神学者たちのグループだよ。

神学を嘲^{あざわ}るものが本当の神学を持つているんです。私は御霊の権威をもつてものを言いますから、絶対に負けやしません。そういう観念でもなければ、御利益でもない。本当の御霊の現実です。

27 朽^くつる糧^{かて}のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の

子の汝^すらに与えんと為るものなり、

今は一般の人は皆、「朽つるパン」のために働いて、「賃金が足りない」と言つて、しょっちゅう闘争をやつてゐるわけだ。国鉄のストライキだつて何だつてみなそうだ。そして、儲けることばかり考えて、どんどん物価が高騰する。これは何が悪いかというと、経済がわるいんじゃないですよ、日本は。要するに日本人の精神の在り方がわるい。その元をただと、教育がなつちやらん。教育がなつちらんということは、教育者それ自身がなつちやらん。小学校から大学にいたるまでダメだ。だから、私は大胆に書いたんだ。

公立学校の校長さんなんてものはロボットみたいで、気の毒になつてしまうわけです。組合が強いものだから何も言えない。こんなことで一体、日本の教育が成り立つかというんだ。とんでもないですよ、今は本当に。私はとにかく獨協中学・高等学校で絶対に負けないですよ、先生方が何を言おうが。もちろん、仰ることはいくらでも聞きます、充分に。正しいことはいくらでも認めます。けれども、ひとたび私の方針に反することがあったら、多数決もへつたくれもない。みんなひっくり返してしまふ。

「それだけの権威が校長になれば、今日にでも辞表を出します!」

と言つてゐるんだ、ちゃんと。なぜ、私みたいな弱虫でうまれつき気の弱いやつが、どうしてこう強くなつてしまつたか不思議でしょうがない。これは御霊なんだ。私の信仰でも何でもない。この御霊が強い。御霊の権威なんだ。皆さんは、

「小池先生はそうかもしれないが……」

なんて、まさかそんなふうに聞いてるんじゃないだろうな。

「私もそうです! 私もそうなんですよ、先生、喜んでください!」

といつて聞いてくれなくては。



●神の業

父なる神は印して彼を証し給いたるに因る』²⁸ここに彼ら言う『われら神の業^{わざ}を行わんには何をなすべきか』

この「何をなすべきか」というのは、しょっちゅうキリスト教会で問題にしては、

「我ら何をなすべきか?」

とやっている。この「何をなすべきか」という言葉は新約聖書に多分、3回か4回出ている。

「神の業」というのは複数で書いてある。

²⁹イエス答えて言いたもう『神の業は

これは今度は単数なんです。

その遣^{つか}し給える者を信する是れなり』

このキリストの言葉、6章29節。今日の集会の中心はこの一言にある。

「神の業はその遣し給える者を信する是れなり」

と。もうたまらんです、この御言は。「信ずる」ということがどんなに凄いことかということ。いつも、「信仰と行為」といつて分けているね。ところが、キリストは分けません。「業」と言っている。

「信ずるということが神業^{かみわざ}である。業中^{わざ}の業である」

と。「信仰と行為」なんて言って分けて、どんな論文を書いたって、いつまでたってもダメだよ、そんなのは。「信仰と行為」ではない。信、即、行です。

「信こそ神業である。信ずるということが人間のなすべき、またなしうる最高最深のことである」

ということ。いいですか。その他にないんです。それが本当の神業だという。しかも、マルチン・ルターが言っているとおり、

「信仰は神の業であって、我々を殺して、新しく生まれ変わらせて、そして、その思いやすべてにおいて全く別人のごとくする。これが本当の信だ」

と言う。ところが、そうすると今度は、

「信仰というのは、どうしたらそんなことになるだろうか?」

と、また考える。そういうふうに考えたらダメですよ。「信仰」というものをまた今度は、「エトバス」「サムシング」(何か)にしまっている。それでは困る。信仰というのは何でもないんです。「信ずる」とは、

「私は信じている!」

なんて偉そうな顔をしたってダメだよ、それは。

●驚くべき実在に圧倒されて

「信ずる」とはどういうことかという、たとえば、ここに花があるね。私はこの花を見



ている。見ているけれども、もし花がなかったら、花が見えますか。見えない。私は花を見ているということは、ここに花があるから、花を見ているということが言える。花が在るといふこの実在が、花という実在が、私に「見る」ということを告白させている。

「信ずる」というのは、相手がなければ、「信ずる」ということは言えないんです。いいですか。キリストという驚くべき相手がいる。これを見ている。これを見ているということが、全身を目にして見ているわけだ。全身を耳にして聞いている。キリストを、全身を目にして見、全身を耳にして聞いている。キリストを見、キリストを聞くというのは、キリストは私に見させている。キリストは私に聞かせている。キリストは私につかみかかっている。主体は花であって、私ではない。主体はキリストであって、私ではない。キリストがかくも迫って、私に見させ、私に聞かせている。この驚くべき実在に圧倒されている。そこに「信」というものが発するんです。

だから、「信ずる」とは、「私が信じている」のでも何でもない。キリストが私をして信ぜしめている。キリストが私をして信ぜしめているこの信を、受けとらないことはあるかというんだ。そういうことがあるかと。

湖の上を涉^{わた}ってきたキリストという驚くべき実在が、この弟子たちを驚かせた。

「いやあ、あなたでしたか!」

と言って、ペテロはこのキリストに驚いて、

「あなたなら、さあ、あなたのところへ私を行かしてください!」

と言ったあのペテロの角度は本当の信だった。だから、ペテロも湖の上を涉^{わた}って行つたんだ、キリストのところへ。ところが、そこまではよかったけれども、風を見たものだから恐れってしまった、沈みかかった。それでペテロは落第。これは、ペテロは聖霊が来てないから。福音書のペテロは、聖霊がきてないから波みたいものだ、漁夫と同じように。彼は漁夫のくせに沈みかかった。

この驚くべきキリストという実在に見せしめられ、つかまえさせられ、聞かせられているといふ、それ自体が即、信なんです。だから、福音書にきて、これにぶつかって、

「福音書のキリストは何でござるか?」

なんてやって、聖書が読めるかというんだ。これに圧倒されて、

「ああ、驚いた。もう私は降参しました!」

と言ってごらん。そういう信が本当に湧いてくる。信は湧かしめられるものです。信は上から与えられるとは、私が信じているのではない。キリストが私をして信ぜしめないではおかないんだ。

ですから、信仰とは正に神さまがしている業である。我々が神業をしているのではない。神さまが、キリストが業をしている。これが私に向かつて業をしている。聞かせられ、見させられ、つかまえられている。このことが即ち信ということだ。



それだけの信を本当に今のクリスチャンがつかんでいるかというんだ。いいですか。そうしたら、もはやもう何も問題はない。相対的現実が何だというんだ。そのような主イエス・キリストに圧倒されてしまう。

「信ずるとは即ち神業である」

というのは、そういう気合の事実なんです。信ぜざるをえない。

「こつちが信じています」

なんて何をぬかすかと。ゲートルが『ファウスト』の中で、

『我信ず』ということが言えるか」

と言ったあのゲートルの奥にこの気持ちがあるとしたら、ゲートルは偉いよ。ゲートルも確かにある角度からそれがわかつている。

「今のクリスチャンが、『我信ず』なんて言ったって、あんなのは空念仏で、何をぬかすか」

というところがある。

「体感していることが一切である」

と、言わんと欲しているところに、今私が言っているような事態が、ある共通したものが彼の中にも動いていたと思う。私が言うほどにはつきりしてはいなかったかもしれないけれども。

「神の業はその遣し給える者を信する是れなり」

という御言の本当の真義はそのような現実であります。

●一切の判断を超越している世界

信仰とは何と驚くべきことか。キリストを100%に受けとっている。こちら側の何ものでもない。一切の判断を超越している世界です。圧倒されている世界です。圧倒されていないで、己に対して「否」と言わないで、本当に汝に対して「然り」ということが言えるか。本当に「然り」と言うことは、己を否定していることなんです。

そうすると、100%の「然り」がこつちへ入ってくる、

「そうだった」

と言つて向こうから。そうしたら、もう驚くべき力がくる。絶対に行きつまらない。キリストはその絶対に行き詰まらないところの驚くべき現実を与えんがためにやって来たんです。そのような具合にして、キリストに捕まえられて生かされているところに、もはや何をか言わん、「永遠の生命」は来ている。永遠の生命というのは、そういうように受けとるところに永遠の生命は来ている。死んでも死なないものが来ている。

皆さん、人にどんなに評価されようが、いいかね、これだけの世界に入らなかったつまらないよ。何と評価されたってかまやしない、そんなことは。地上の生涯は失敗だらけだつ



ていいよ。

「大成功、我にあり!」

と、そういう叫びが言えなくては。地上のことは、相対的なプラス・マイナスが何だというんだ。本当のプラスはこのキリストの福音でなければ与えてくれないんです。それだけの信仰が今、キリスト教界に、世界中に^{あかつき}暁の星ほどあるかないかというようなわけだ。

聖書の御言は、

「わが言は靈なり、生命なり」

「わが言は意味ではないぞ」

と。「私の言の意味が分かるか」なんてキリストは言ってやしないんだ。

「聴く耳ある者は聴くべし」

と言っている。「意味はこうである」なんて、説明してやしないんだ。

「靈なり、生命なり」

という。即靈であり、即生命である。口に発すれば言葉となり、手に発すれば行為となるだけのなし。言も行も一如です。そういったキリストを

「はいっ!」

と言って全存在で受けとることを「信ずる」という。そして、信ずるところには、このように受けとるところには、絶対にそれは成就している、聞かれている。「祈る」とは、そのようなキリストの中に祈り込むことです。そのようなキリストの中に身を投ずることが「祈る」ことなんです。だから、私たちがキリストの中に身を投ずれば、

「御意を成させたまえ」

なんて体裁的なことを言う必要はないんだよ。御意の中に入ってしまうから、必ず成っていくんです。現実には罪の現実だから、ズレがきているかもしれないよ。そんなことは心配いらん。もうひとつ奥の世界の現実で必ず成っている。人間の思いで祈ったことは聞かれないかもしれない。聞かれなくても、聞かれない以上のが聞かれているんです。

● 図太い世界

私という人間は図太いんだ。私が図太いのではない。信仰の世界がそんなに図太いんだ。

「こういう場合にはこうです」

なんていう、くだらないことはなくなってしまう。聖書の世界は、「…であろう」なんていう世界はなくなってしまう。讚美歌でも、「…であらん」なんていうのがあるけれども、「あらん」ではない。「である」なんだ。そういうつもりで歌わなくてはダメですよ、歌うときには。「たまわん」ではない。「たもう」なんだ。「…したまわん」なんていう讚美歌がたくさんあるけれども、「たまわん」ではない。「…したもう」なんだ。

だから、聖書の口語訳なんていうのは気がぬけてしまっしょうがない。私は文語訳が



好きだというのはそのことなんだ。ただ文学的に好きだというのは。はつきりものを言っているから。口語訳だつてはつきり断定すれば、いつこう差し支えない。あなた方は、ギリシア語やヘブライ語ができなくなつていいから、もうひとつその奥をつかまえて、自分で日本語の聖書をどしどし改訳したらいい。

「私の聖書はこうですよ」

と言って、どしどし御霊でもつて訳してしまう。日本語でその奥を訳してしまう。

「ギリシア語やヘブライ語はどうだか知りませんよ。それは御霊がちゃんと示していますからね」

と。それだけのことが言えなければダメですよ、本当に。

「**神の業はその遣し給える者を信する是れなり**」

とは本当にうれしい。信仰だけが本当のわざです。業中の業が信である。そして、神業だから成つていく。不可能なことがないんです。だから、キリストが一切のことをしたでしよ。天国を本当に彼は現じていたでしよ、天国の徴を。あれはみな徴ですよ。

「やがてこういう国が来るぞ」

という予表をみんな現していたんです、キリストは。イザヤ書35章のあの美しい終末の預言をキリストはもう福音書でもつてやってのけてしまった。まず驚くべきひとです。このキリストは神さまを「父よ」と言つて、絶対に信じこんでいた。本当に神の中に入った。このキリストを受けとらないやつはダメだよ、もちろん。

「この頃ずいぶん違つた變つたことをしているが、あれはどこから教つたのか?」

なんて、キリストの近い親しい人ほどそれが分からない。だから、キリストは、

「**家の者がその敵である**」

なんてことを言うんだ。

●靈的具體性

30 彼ら言う『さらば我らが見て汝を信ぜんために、何の徴をなすか、何を行
うか。31 我らの先祖は荒野にてマナを食えり、録して「天よりパンを彼らに
与えて食わしめたり」と云えるが如し』32 イエス言い給う『まことに誠に汝
らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝らに与えしにあらず、

天よりのパンを与えたのはモーセではないよと。

然れど我が父は天よりのパンを与えたもう。33 神のパンは天より降りて生命
を世に与うるものなり』34 彼等いう『主よ、そのパンを常に与えよ』

その問答がね、すぐ彼らは

「本当にどんな不思議なパンがあるんだろうか?」



なんて思っているわけだ。

³⁵ イエス言い給う『われは生命のパンなり、
という。』

「お前たちは、パンがどこにあるかと思っている。私が五千人にパンをやつたら、そういうようなパンがまたくるかと思つてまた見ている。パンを食らつたがためにお前たちはパンばかり問題にしているが、そんなパンではない。あの奇蹟のパンは、奇蹟のパンであつたかもしれないけれども、私がそれだけの奇蹟をやつたからといって、その奇蹟のパンを大いにありがたがつたつてダメなんだ。その奇蹟のパンを与えた私が本当のパンだぞ」

というんです。無限パンだ、無限無量のパンだぞと。それが読めないものだから、

「そんなパンがどこから来ますか。くださいよ！」

なんて。即ち、御利益ごりやくを見て、本当にキリストを見ていない。キリスト自身が本当の徴であることが分かつていない。

われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも

渴くことなし。

「渴くことなからん」ではない。本当は、「渴くことなし」だ。ギリシア語の表現は、「なからん」でしょう。けれども、そんなのはどうでもいい。ギリシア語で、将来はそういうことはないということを未来形で言っているが、そいつを日本語にすると「なからん」になる。けれども、その「なからん」ではダメなんだ、日本語は。「なし」と言つた方がいい。将来に対する断定を言っている。未来的な時称で使つてあつても、日本語としては未来的な時称を直訳するようなことをしたらダメなんです。

「我を信する者はいつまでも渴くことなし」

とはどういうことですか。「信ずる」とは何ですか。さつきから言っている通り、

「キリストは生命のパンである」

という事柄、命題を信じているのではないですよ、「信ずる」というのは。

生命のパンである。しからば、その生命を受けとることが「信ずる」です。受けとること、具体的に受けとることなくして、「信ずる」なんてことはありえない。キリストを具体的に受けとることなくして、「信ずる」ということはない。キリストを具体的に受けとるとは何か。霊的現実の世界、霊的具体性の世界です。霊的具体性の世界なるキリストを受けとる。私たちは、キリストは見えない。見えないけれども、福音書に現象している。この福音書は全部、そのキリストの徴だからね。

●生命のパン

「われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、



「我にきたる者」も、「私を受けとる者」も、「我を信する者」もみな同じこと。それは、いつまでも渴くことなし。³⁶然れど汝らは我を見てなお信せず、

「私が生命のパンであることを本当に受けとらず」

ということだ。「信せず」という言葉に躓くなら、「本当に受けとらず」と読めばいい。

我さきに之を告げたり。³⁷父の我に賜うものは皆われに來らん、我にきたる

者は、我これを退けず。³⁸夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、

我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。

聖意体现のためにキリストはやつて來たんだと。

「御意の天に成るごとく、地にも成らせたまえ」

とは、

「この地の我を通して成らせたまえ」

ということですよ。傍観して言っているのではないのだから。あなた方一人びとりがそれだけの使命を持ったところの存在なんです。自分を決して卑下してはいかんですよ、その点においては。

「このダメな野郎を通してこそ神さまはなさろうとされている。ありがたいなあ」というわけだ。こんなありがたいことはない。

³⁹我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。

終りの日に甦らせるんですけれども、御霊の世界ではもう既に甦ってしまうんです。本質的には甦ってしまう、我々は。復活の生命をいただいているんだから。キリストをいただいたから、御霊において。「十字架・復活」を通していただいていますから。

⁴⁰わが父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』

と、繰り返し言っておられる。しかし、永遠の生命は私したらダメですよ。永遠の生命は限りなく人に与えていかなくては。また与えざるをえない。もう自分の中に溢れているから、これは与えざるをえない。与えれば与えるほどいよいよ上からやつてくる。

「この永遠の生命は大事だから、とっておこう」

なんてやつていたら、その永遠の生命は腐ってしまうよ。永遠の生命は、光は流れてやまず、何万光年の向こうから光は通ってくる。

そういうように光とはもの凄いね、二千光年の彼方から大望遠鏡で見れば、キリストが見えるよな。そういうキリストを見たいかな？ いや、そんなことをしなくても見える。ちゃんとこの福音書をじつと見ていれば。



●霊的現実

それから後は、ずっといろいろなことが書いてある。要するに、

「我は生命のパンなり」

ということを非常に言っているらしいやいます。そこで、あまり「自分を食らえ」とか言うものだから、52節、

52ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』

「生命のパンだ」なんて言うから、

「どうして食わせるか。『私を食え』なんていうことは、とんでもない野郎だ」
なんて。どうしてユダヤ人はこうバカなんだろうね。

53イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。54わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終りの日にこれを甦えらすべし。』

まあ、激しい言葉だね。それはやはり遊牧の民だから、羊の肉を食ったり血を飲んだりするような民ですから、彼らとしてはこういうことが平常的なことなんです。日本人はむしろ菜食の人種ですから、あまりピンとこないような血なまぐさい言葉だ。

けれども、我々は肉や血のある体を持つているから、キリストという――この肉この血この骨は枯れてしまうけれども――枯れない骨、いつまでも生き生きとしているところの霊体、この霊体を本当にいただく。

「キリストの霊体を受けとれ」

というわけだ。どこまでも御霊のことです、具体的には。

55それわが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。

別のところでキリストは、

「自分は霊のことを言っているので肉のことを言っているのではない」

ということをやっている。「肉のこと」というのは、いわゆる肉体的な、相対的な肉体のことを言っているのではない。

「霊的現実のことを言っているのだ」

ということをやっておられますが、その通りです。

56わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。

だから、

「主さまー」

と言うときには、本当に生けるキリストにつらなる。そこがどうしても御霊の世界ですから。そのことは祈りの世界で自分で体験してください。

「何かしらんけれども、どうも力が満ちてしようがありません」



ということになってきますよ。それはみんな不思議なんだよ、信仰の世界は。我々みたいなこういう現実を知らないものだから、ある同僚に、

「私は、小池さんとは歳は同じなんだけれども、体も大体似ているけれども、どうしてあんなにエネルギーがあるのか、若いときからたくさんいろんな運動しているからか？」

なんて言われる。私は運動もしていたかもしれないけれども、そんなことではないですよ。このエネルギーは上から来ている。私は忌憚なく時々言うんです、そのことを。

「力が上から来ますよ」

と。「上からとはどういうことか？」なんてね(笑)。

●キリストと一つになる

そこで、その終りの方に出ている。いろんなことを言ってつぶやくものだから、躓いているでしょ。60節あたりからずっと読んでごらん。

60 弟子たちの中おおくの者これを聞きて言う『こは甚だしき言なるかな、誰か能く聴き得べき』

『ずいぶんひどいことを先生は仰るな、肉を食らえだの血を飲めだの』とつぶやく。

61 イエス弟子たちの之に就きて咄くを自ら知りて言い給う『このことは汝らを躓かするか。』

弟子たちも御霊を受けていないからダメなんですよ、いくら弟子でも。

62 さらば人の子の原居りし所に昇るを見ば如何。

天界に昇っていったら、お前たちはどうするんだと。

63 活すものは霊なり、肉は益する所なし、

ここにちゃんと書いてある。

「いわゆる相対的なことを言っているのではないぞ。私の表現は、「肉を食らえ、血を飲め」と言っているけれども、それは表現の上でそう言わざるをえないので、その私が今、「肉」と言い、「血」と言っているものは何であるか」

と。十字架の贖いの血です。しかし、「贖いの血」と言ったって、キリストの血はただ流れてしまっただけだよ。その血に何か不思議な何かがあるのでも何でもない。自分を本当に捨てて、私たちの罪を本当に贖った。そして、本当に御霊においてこの霊血を、霊の血を与える。霊の肉を食らわせる。これが「永遠の生命」ということ。だから、

「活かすものは霊なり」

とはつきり言われている。

「お前たちも分からないか。霊的な現実のことを言っているんだぞ」と言うんだ、今、私たちの言葉で言うならば。



わが汝らに語りし言は、**霊なり生命なり。**

「みんな霊の現実、生命の現実だから、受けとりそこないをするな。信仰は観念ではないぞ。「私が父の懷にいる」というのも、そういった霊的現実のことを言っているんだ」

と。「父」と言っても、髭のはえているお爺さんでも何でもなし。

だから、一般の人たちにはおよそ遠いんだよね、こういう現実には。けれども、こういう御霊の現実がなければ、人間の魂は実はどうにもならないようにできている。また、これを得たらもう実に自由自在な、楽しくて楽でしようがない世界です。

「それだけは要らないよ」

といつて、みんな文化文明でやっているんだから、気の毒なはなしですよ。だから、私は言っている。

「文化文明の根底は真の宗教にある」

と。何かに囚われたらダメですよ、文学にとらわれたり、政治にとらわれたり、経済にとらわれたり、法律にとらわれたり、とらわれたらダメだ。しかし、一番奥は、この御霊の福音の世界には本当にとらわれなくてはいかん。そこに酔わなくては。そうしたら、他のものは楽にみんな評価できるし、ちゃんとオリエンティーレン「方向づけ」ができて、それをこなすことができるようになるんです、福音の世界からは。だから、仏教であろうと、何であろうと、全部これを読んでいて楽しくなってしまう。それはキリストが凄いから。

どうぞ、皆さんは、今日私たちが受けとったヨハネ伝6章の事態の中心は、この「信ずる」ということがどのような事態であつたか。自分が力んで信ずるのでも何でもなかつた。キリストという花が私を見させている。キリストという花が、キリストという星が——何でもいいよ、その表現は——それが私をして見ざるを得ざらしめている。信ぜざるを得ざらしめている。これに圧倒されていることが、「信ずる」ということであつた。即ち、「受けとる」ことであつた。即ち、「一つとなる」ことであつた。即ち、即如の世界であつた。はい、おしまい。